目次

第一部　上代歌謡散策

国生み物語6　上代歌謡散策（イ）8　上代歌謡散策（ロ）10　上代歌謡散策（ハ）12
上代歌謡散策（ニ）14　上代歌謡散策（ホ）16　上代歌謡散策（ヘ）18　上代歌謡散策（ト）20
上代歌謡散策（チ）22　上代歌謡散策（リ）24　上代歌謡散策（ヌ）26　志良宜歌（しらげうた）と夷振（ひなぶり）の上歌（あげうた）28
宮人振（みやびとぶり）30　天田振（あまだぶり）32　天語歌（あまがたりうた）34　海柘榴市（つばいち）の歌垣36

第二部　袖の流れ

袖の別れ40　妹が袖別れし日より42　袖交へし君44　袖片敷きて46
手枕の袖48　袖のよそに50　袖は濡れけれ52　袖濡らす秋54
秋の露や56　袖の上の露58　袖にたまらぬ白玉60　袖の香62　君がため64
すべなきときに振った袖68

第三部　歌の流れ・時の流れ

第一章　宇多天皇から村上天皇の御代まで

宇多天皇の出家と橘良利74　醍醐天皇皇女康子のこと76　藤原高光の出家78

藤原伊尹と女(イ)80　藤原伊尹と女(ロ)82　朱雀天皇譲位の歌84

朱雀天皇崩御と昌子内親王86　保明親王の死と大輔の君のかなしみの歌88

村上天皇女御徽子の琴90　藤原義孝、父伊尹を悼む92　義孝あの世で歌を詠む94

故藤原敦敏に東人馬を贈る96

第二章　冷泉天皇から一条天皇の御代まで

花山天皇の出家の真相と御製98　花山天皇の叔父藤原義懐の出家100

安和の変と花山女御婉子のことなど102　冷泉院と花山院104　儀同三司母貴子の歌106

伊周・隆家配流(イ)108　伊周・隆家配流(ロ)110　伊周・隆家、貴子の墓に詣ず112

彰子入内と定子崩御114　定子崩御と一条院の悲しみ116　詮子崩御118

第三章　三条天皇の御代

三条天皇尚侍綏子への娘近江の挽歌120　三条天皇女御原子のこと122

三条天皇に入内した女性たち126　娍子・妍子二后並立、娍子の不安128　三条天皇の退位130

敦明親王の東宮退位と女御延子の悲しみ132　小一条院敦明親王の堀河女御への歌134

第四章　後一条天皇崩御まで

藤原公任136　一条天皇法事の日の彰子の歌138　斎院選子内親王の彰子への歌140

道長自祝の歌142　彰子春日社行啓の歌144　斎院馨子内親王と威子の行啓146

後一条天皇崩御と源顕基の出家148　彰子の顕基への返歌150

第五章　後朱雀天皇崩御まで

禎子、後朱雀天皇を偲ぶ歌152　章子入内前後、威子を偲ぶ女房たち156

法成寺他大火災160　後朱雀天皇、中宮嫄子を悼む歌162　禖子斎院退下のことなど164

後朱雀天皇女御生子のこと166　生子、彰子にわが身を嘆く168

第六章　後冷泉天皇まで

後三条院住吉に詣ず170　後三条院への教通の歌172　俊綱174

小式部内侍と教通176　春の来ぬところはなきを178　小式部内侍を悼む180

後冷泉院の御時皇后宮の歌合182

第七章　摂関政治の夕暮

白河天皇の大井河行幸184　白河の花の宴186　忠実宇治籠居前後192

鳥羽天皇の忍ぶ恋の歌194　崇徳天皇、父鳥羽院に懇願の歌196　保元の乱の兆し198

俊成女(としなりのむすめ)の歌200　宮内卿の歌202　後白河法皇の大原御幸の歌204

あとがき206

国生み物語

あなにやしえをとこを　あなにやしえをとめを

伝伊耶那美命・伊耶那岐命
『古事記』

古事記のはじめにある伊耶那美命・伊耶那岐命のこの応答の表記は「阿那邇夜志愛袁登古袁」「阿那邇夜志愛袁登売袁」と一字一音の表記になっている。これが二神の国生み物語の中にあり、続けてこの二句が次には逆に唱されるのだが、五音二句ずつ四句の前後、また二句ずつの間の物語の部分は漢文式の表記になっている。すなわち、二神がおのころ島で天の御柱を巡り聖婚するときのこの応答の直前の「かく期りて、乃ち『汝は右より廻り逢へ。我は左より廻り逢はむ』と詔りたまひ、約り意へて廻る時、伊耶那美命、先に」という部分の記述を示すと「如此之期、乃詔二汝者自一右廻逢、我者自左廻逢一。約意以廻時、伊耶那美命先」である。今日、五線譜の楽譜の下に歌詞を記すときは、各音符の下に音符ごとに歌詞の一字ずつを書くことがされる。このことと合わせてみるなら、掲出の応答が五五・五五の二句ずつ計四句の唱和された歌謡であったことを示す表記になっているのだと理解されよう。これは古代歌謡表記の特色で改めていうことではないが、本稿読者には御存じない方もあると思ってことさらに記しておくのみである。

さて二神の唱和ではじめに「あなにやしえをとこを」といったのは女神で、男神は後から唱えた。そ

こで生れたのが不完全な子蛭子であったので葦船に入れて流してしまう。続けて生まれた子も不完全な子ばかりなので、天つ神に相談する。天つ神は、女神が先に唱うのがよくない、もう一度おのころ島に帰り、唱い直しなさい、と教える。そこで二神は天つ神の教えに従い、先のように天つ御柱を廻りながら、今度は男神、女神の順に唱和して、次々に丈夫な子（島）を生んだというのである。

ここで、以上の唱和をまとめると、はじめ伊耶那美が「あなにやしえをとこを」と唱え、次に伊耶那岐が「あなにやしえをとめを」と応じたのは、明らかに一連の五五・五五の唱和だが、続けてもう一度、これを逆の順でくり返して唱和するというのは、どうやらこの二段の唱和が一つの歌舞の場における唱われ方の形であったのではないかということである。物語の部分における天つ御柱をくり返し廻り直すというのも、劇におけるくり返しの所作を思わせる。すると、実はこれはもともとは、古事記における岐美二神の国生み物語とは別にあった男女のかけ合いの、歌垣的な世界のおおらかな劇的な歌声であったと思われるのである。